

文化の越境、市民が作る日韓関係

2000年代に始まった韓流ブームにより、多くの日本人が隣国の文化や歴史に関心を持つようになり、市民レベルの訪問や交流が始まりました。大衆文化のパワーが「近くて遠い国」だった韓国と日本の距離を近づけ、日本人の心理や娯楽生活を大きく変えたのです。

このシンポジウムでは、アートとドラマという二つのジャンルから韓国文化の魅力に迫り、最新の動向や、日本との関係性などを探っていきます。各分野の専門家の報告に加え、市民（来場者）にもディスカッションに参加してもらうことにより、文化の越境がもたらす新しい時代の日韓関係が見えてくるでしょう。

プログラム

第Ⅰ部（午後1時開始） 韓国現代アートの世界

「『風の絵師』申潤福（シン・ユンボク）から韓国現代アートのスーパースター鄭然斗（ジョン・ヨンドウ）まで」

報告 徐京植（ソ・キョンシク、作家・東京経済大学教授）

対談 チョン・ヨンドウ（アーティスト）× 徐京植

司会：大田美和（歌人・中央大学教授）

第Ⅱ部（午後3時30分開始） 韓流は何をもたらしたか——2016年から問い直すドラマの可能性

「女性の観点から考える韓流サブカルチャー論：第3段階への進化」李香鎮（イ・ヒャンジン、立教大学教授）

「号泣する準備はできたのか——日本における韓国ドラマ受容」宇佐美毅（中央大学教授）

司会：榎本泰子（中央大学教授）

報告者プロフィール

徐京植（ソ・キョンシク）

1951年京都市生まれ。在日朝鮮人。作家、東京経済大学現代法学部教授（「人権論」「芸術学」ほか担当）。芸術関係の主な著書：『私の西洋美術巡礼』『汝の目を信じよ—統一ドイツ美術紀行』『私の西洋音楽巡礼』以上みすず書房、『青春の死神—記憶としての20世紀絵画』毎日新聞社、『ディアスポラ紀行』岩波新書、『越境画廊—私の朝鮮美術巡礼』論創社、『詩のカー「東アジア」近代史の中で』高文研、『子どもの涙』柏書房、『新編プリーモ・レーヴィへの旅』『抵抗する知性のための19講』以上晃洋書房、ほか。

ジョン・ヨンドウ（鄭然斗）

1969年韓国晋州生まれ。2007年に韓国の国立現代美術館が主催する賞「アーティスト・オブ・ザ・イヤー」に史上最年少で選ばれ、2008年にはニューヨーク近代美術館で個展が開催されるなど、国際的に高い評価を得ている。2014年11月から水戸芸術館で開催された企画展「ジョン・ヨンドウ 地上の道のように」はNHK「日曜美術館」でも紹介され、大きな注目を集めた。

李香鎮（イ・ヒャンジン）

立教大学異文化コミュニケーション学部教授。専門はナショナリズム/トランスナショナリズムと映画文化研究（韓国・北朝鮮・日本ほか）。英国シェフィールド大学東アジア学部准教授だった2005年から2年間、立教大学客員研究員を務め、韓流についての調査をおこなう。著書に『韓流の社会学—ファンダム、家族、異文化交流』（清水由希子訳、岩波書店、2008）、*Contemporary Korean Cinema: Identity, Culture and Politics*（現代韓国映画：アイデンティティ、文化、政治）、Manchester University Press, 2001など。

宇佐美毅（うさみ・たけし）

中央大学文学部教授。文学研究者・テレビドラマ研究者。文学研究者としては、村上春樹を中心とした現代文学を明治期以降の小説史に位置づける研究をおこなっている。テレビドラマ研究者としては、日本の戦後史とテレビドラマの関係や、テレビドラマ脚本家の作家論的研究をおこなっている。著書に『小説表現としての近代』（おうふう、2005）、『テレビドラマを学問する』（中央大学出版部、2012）、編著に『村上春樹と一九八〇年代』（おうふう、2008）、『村上春樹と一九九〇年代』（おうふう、2012）など。

このシンポジウムは2016年度中央大学文学部プロジェクト科目「アジア共同体を考える—共に生きるための15のヒント」の関連企画です。

